

# Triumph onedollar ～勝利へ の放浪者～

リューヤ

## 鋼のレジスタンス

．．．．．また気絶してしまった。これでもう4回目だ。

全身が痛む、骨が軋む、内臓もいくつが潰れている、瓦礫の山にブチ込まれた背中がズキズキする。

やはり奴は強かった．．．想像以上の凶悪さ加減だった。連中を逃がし、たった一人でグスタフにケンカを申し込んであれからたったの5分、ジンの体はボロ雑巾と化していた。

たったの5分間で、ジンは自分の持てるすべての技を繰り出したが、全く通用しなかった。

序曲．．．小規模の竜巻の中に飲み込んで斬り捨てようと企てたが、竜巻そのものを物ともせず失敗。

始曲、終曲．．．高速で切裂いたところで肉体は即時再生され失敗。

交響曲．．．同上

協奏曲（コンチェルト）．．．切断ではなく突き刺す技、顔面の貫いても効果なし。

奏鳴曲（ソナタ）．．．両刀を用いた連続刺突、大量の風穴はすぐに塞がれる。

輪舞曲（ロンド）．．．細切れ作戦、自らを独楽の如く回転させて突進、10等分に両断するが効果なし。

追復曲（カノン）．．．斬るという考えを改め峰による打撃、骨を砕くが数秒で再生。

遁走曲（フーガ）．．．交響曲派生技、瞬速の居合切り、首を落とされてもなお活動可能な肉体に驚愕。

組曲．．．序曲から遁走曲までの混成奥義、ヤケクソになってかましてみたが効果は薄い。とても疲れる。

鎮魂歌（レクイエム）・・・最終楽章、全部の力を使い切り目標を高速連斬、一撃分で相手を85回殺したことになる必刀滅殺、分かってはいたが間もなく回復に成功され反撃。

何もかもが虚しいほどに効果無し、もうこの状況は笑うしかないだろう。メガネのレンズが割れてしまい視界もすっかりぼやけて何が何だか分からなくなっている。

だけど一つだけわかる・・・前方に立っているグスタフは今、勝者の笑みを浮かべゴミ同然の姿になった自分を見下して笑っている。反撃したい気持ちは山々だが、もう体が言うことを利いてくれそうにない。

「クックックッククック・・・もう終わりか、小僧？」

「生憎とまだピンピンしてらぁ、本番はこれからだ」と言ってやりたいがそれも無理だ。瀕死の状態なのは誰の目から見ても明らかだし、自分でもわかっている。

勝てそうにない、負けてしまうかもしれない、そんな弱気なセリフは口に出さずにジンは奥歯を食いしばり立ち上がる。刀を杖にしてようやく立ち上がるまでにはいいが、もう立っているだけで拷問に近い気分させられる。両足がガクガクと震え、全く力が入らない。

でもそんなことをいちいち気にしていたらこの喧嘩に勝利する光も見えなくなる。勝利を得るための光が髪の毛一本程度の大きさだったとしても、それに縋ることができるのならいくらだって無理をしてやれる。

「へへへ・・・そろそろキツくなって来たな。いい加減終わらせるか？」

「そうだな、私も十分楽しませてもらった。次の一撃で終わりにしよう」

ジンは刀を一本だけ仕舞い、一刀流の構えを取る。こうなったら攻撃の手数を捨てて技の精度のみに頼ることとする。

散々切り刻み続けていた最中、一個だけ気になることを見つけている。それはグスタフの心臓の事だ。

両断された肉体の中から一瞬だけ奴の心臓が見えだ。心臓は力の根源となっているダイヤモンドと同化しながらも動き続けていた。もしもあれを切り離すことができれば・・・もしかしたらあれがグスタフを殺すことができる唯一の方法だとしたら・・・などと考えながら刀を一直線に心臓をめがけて構え直す。

そして走った。空っぽになった自分の体に残っている力を一滴残さず絞り出して、気合を入れるために大声を上げて、心臓を、ダイヤモンドを狙って走った。

「ウォラアアアアアアアアアア！！！！」

目の前から鋸が迫ってきた。だがもう関係な、この身体が切裂かれるなら切裂いてしまえ。欲しいなら腕の一本でもくれてやる。その代り、俺は心臓をもらう！

ズバァァァ！！

お互いの攻撃が交差し、二人は背中を合わせるように静止した。ジンの手の中には何かを切り裂いた感覚がある。同様にグスタフも何かを切った感触を持っている。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・私の勝ちだ」

グスタフが笑みを浮かべた瞬間、ジンの左腕が肩から落ちた。血液が切り口から迸り、湧水のように吹き出す。

強烈な激痛と傷口が熱を帯びた鉄で炙られるような、そして極度の貧血も相まって、ジンはその場で片膝をついた。今までに感じたことの無い痛み、苦痛、激痛、正直たまらなかった。こんな苦しみを受けるくらいならいっそのこと潔く・・・・・・・・

・・・

・・・

・・・

何を考えているのだろうか？よくよく考えてみれば、この痛みは今まで自分が敵とみなした相手全員に味あわせた痛みとまったく同じである。人間を斬ることができる人間は自分が斬られることも覚悟していなければならない・・・当然の結果であろうに何を甘いことを言っているのだろうか。

肝心のグスタフはと言えば、刀の軌道はずかには逸れてしまい心臓ではなく隣の肺を切り裂いてしまっていたようで、何のことも無く傷口は煙のように消え去ってしまっていた。

「クククク・・・どうした、腕が一本千切れているぞ？動けないのなら手を貸してやろうか？」

「・・・・・・・・・・へへへへへへ。礼を言うぜゲテモノ野郎」

ジンはそれでもなお笑みを浮かべていた。まるで何事も無かったかのようにゆっくり立ちあがると、最後の一本であったタバコを啜って右腕一本で刀を構えた。その瞳の中には鬪争の火は消えておらず、まだまだ戦えることをアピールしている。

「腕一本無くなったおかげで体が軽くなった。これでまだ少し喧嘩ができそうだよゲテモノ」

ただの強がりではなかったが、腕が一本残ってさえいれば刀を握ることができる、足が残っていれば立ち上がることもできる。その答えに間違いはないと信じている。故に戦える、まだまだ喧嘩を楽しむことができる。この程度のケガなどケガのうちにも入らない、そう言い聞かせながら切っ先をグスタフへ向け、もう一度笑って見せる。

「まだ腕が一本千切れただけじゃねえか・・・能書き垂れてないでさっさとかかって来いよ、ハリー・・・ハリー！！」

強がって余裕を見せているが、ジンの顔面は血の気が引いて真っ青になっている。呼吸の絶え絶えで、今にも死んでしまいそうな風体を成している。

それでもなお戦いを挑もうとする人に対し、グスタフはその姿を鼻で笑った。今のジンのその姿は、まさに滑稽そのものでしかない。弱弱しい人間の強がり、あまりにも下らない、あまりにも醜い。

見るに耐えかねたグスタフはとうとうジンに引導を渡すことを決意する、というのは建前で本当のところを言うところの喧嘩に飽きてしまったからだ。

立っているだけでも億劫なジンの腹に拳をめり込ませた。拳の中で骨と内臓の碎ける感触を確かめると、そのまま力いっぱい殴り抜ける。枯れ木のようなジンは一瞬で視界から消え、耳の奥で瓦礫と共に粉碎される音だけが響いた。

正面へ数10m歩いた先にジンはいた。うつろな瞳をしており、その体からは生気を全く感じなくなっていた。しかしそれでも、ジンは刀を離していなかった。それどころか、光の消えかけている瞳がグスタフの姿を捉えると、ジンは必死になって立ち上がろうと奮闘する。意識はもうないはずなのだが、感覚のみでグスタフに戦いを挑もうとしているのか・・・それは分からない。グスタフはそんなジンの右足を掴むと、まるで釣り上げた魚のように逆さまに持ち上げた。そこでようやくジンが意識を取り戻し、自分が置かれた状況を把握する。釣れたての魚よろしく、ジタバタと跳ね回って唯一自由にな合っている左足でグスタフを攻撃する。攻撃と言っても実際は小突いている程度のもので、ダメージと手微塵もない。

「この野郎、離せ！離せやコラ！！」

「・・・煩い魚はこうしてやろう」

いい加減「鬱陶しい」を超えたもっとひどい感情・・・これを「ウザい」というのだろう。

グスタフは右手で足首を、左手で太ももを鷲掴みにする。あまりの握力にジンの足は軋み、肉が潰されそうな痛みに表情を濁らせる。

だが次の瞬間、その濁った顔は一瞬で変り果てることとなる・・・果てしなく悪い意味で、だ。



「手こずらせ負ってからに・・・神に抗おうとするからこうなるんだ。さてと、残りの5人を追うとするか」

グスタフはいつまでも悠々とした態度を取っている。この先に走り去ったであろう方向を見据えると、腕の鋸の時と同様に今度は両足が変化を始めた。

膝から下がまるで車輪のような形を成したかと思うと、全体からナイフのような突起物が無数に生えだした。そして腰からは車の排気口のような筒が出てくると、グスタフの体からガルンッ！と車のエンジンがかかる音が発生した。

直後下半身の凶悪なデザインの車輪が回転し、石畳の上を火花を散らしながら高速で疾走する。グスタフはすでに車のエンジンどころか、車そのものを取り込んでおり、その性能を使用して人間では不可能な速さで移動できるようになったのだった。目指すはジンが逃がして残りの5人、砂漠に逃げたとてそのタイヤの跡と超人を上回る視力をもってすれば追いつくことは訳もない。そのまま街道を抜けると、グスタフは砂漠の向こうへ姿を消してしまった。

取り残されたジンの目にもその姿はギリギリ映っており、残された一本だけの腕を必死に伸ばしてグスタフにしがみ付こうとしたが、もうそれすら無理のようだ。

負けたことならいくらだってある、地元の村にいた時自分の親父と少ない食べ物を取り合って何度も喧嘩し、何度か勝ち、何度か負けた記憶がある。ガキの頃同じガキ同士で喧嘩して負けたこともある。動物相手に対決を挑み負かされたのはもう数えきれないくらい経験している。

この旅を始めるきっかけも自分の負けから始まったようなものだった。

負けるのは嫌いだが・・・今日のこれはそれ以上に嫌いだ。

敗北・・・しかも頭に完全が付くほどの敗北。

いつの間にかジンの口から離れてしまったタバコの火が消えるのと同時に、全ての力を失ったジンの腕はそのまま地面の上に落ち、もう自力で持ち上がることはなくなった。

アーウエンの町を脱出してあっという間に10分、ジンを除いた残りの5人は岩と砂の入り混じった荒野をひたすら北へ向かって走っていた。

アーウエンから北へ20km行った先に別の町がある。そこはフェイファー軍の管理下にある街だが文句は言えない。

ドクターが拝借してきたこの車なのだが、運の悪いことに燃料が残り少ないことに気づかされたのが5分前、懐の蓄えは心許ないが燃料と度に必要な食料や水を一度補給しなければならない。同時に一度この国から出ることも計画している。

カール・グスタフ・・・奴の手に入れた力はあまりにも強大過ぎ、凶悪すぎる。今の自分たちの力だけでは太刀打ちできないと踏み今後はグスタフの追撃から逃れることと同時進行で残りの宝石を捜索、捕獲。強い魔力の塊である宝石の力を借りれば何とかなるかもしれないというわずかな希望を胸に車を走らせる。

オニクスという宝石を一行は持っているが、残念ながらオニクスの持つ効果は精神力の向上、及び邪念と邪気のお祓い。とてもではないが戦闘に役立てられるとは考えにくい。

車内では5人とも全員終始無言を徹底してばかりで、非常に重苦しい雰囲気になり込んでいる。虎眼の一撃から復活したアゲートは殴られた頬をさすりながらずっと窓の外を見ていた。だがアゲートの目の中には外の流れゆく景色など映ってはいない。

「・・・なあ、兄貴？」

「却下だ」

「なんも言ってないさ・・・」

「大方予想がつく。ジンの所に戻してくれなどと言いたいのだろ？却下だ」

「だって、ジン一人だけで何とかなる相手じゃないのは兄貴だってわかってるはずさ！！なのにオレっち達こんな・・・」

「・・・気持ちはよく分かるよバンダナ君」

「ドクター・・・じゃあ」

「けどその意見に小生は賛同できない・・・彼が小生達を逃がすための時間稼ぎ、又は囷になってくれたのならば、小生達はその思いをしっかりと受け止めて全力で逃がしてもらおうと思ってる。それがせめて小生達ができる最良の選択だと理解したまえ」

「アタシもそう思う。まどうせアイツの事だからそんな人の為を思った行動じゃないだろうけどな」

「私は・・・ドクターが居る所に行きたいと思ってるネ。ドクターが逃げるというなら、私も同じ場所に逃げたい。確かにアイツ、凶暴過ぎヨ」

「真悔しい思い出腹が立つ・・・結果的に見れば俺達は弱い、蟻がいくら立ち向かったところで象には勝てない」

悔しい思いをしているのは皆が一緒である。

今のグスタフにはジェットの炎も、ドクターの魔人や氷の魔術も、アゲートや虎眼たちの攻撃も

効かないかもしれない。この逃げるという選択には力を蓄える目的が含まれている。あくまでも一時的な撤退、いつか必ずグスタフに立ち向かい・・・そしていつか

「納得できないさ！！！」

「・・・バンダナ君いい加減にしまえ。君だってもうガキではないだろう？」

「もうこの際ガキでいいさ！！子ども扱い上等さ！！兄貴もなんでそんなに弱気になってるさ？自分が蟻である野郎が象なんておかしいさ！！象は兄貴のはず・・・むしろ兄貴は象どころかドラゴンだって素手でぶん殴れるくらいの男さ、それが何で！？」

「貴様いい加減にしろ・・・また殴られたいか？」

虎眼の拳が震え、眉間に深いしわが刻みこまれ始めた。

正直に言えば自分だってジンに加勢したい気持ちがあると言えばそれは嘘にならない。だが自分は・・・今の自分はグスタフよりも弱く、そしてジンよりも弱い。そんな弱い男が加勢したところでジンの足手まといにしかならないのは目に見えている。

アゲートの言葉全てが耳に痛い、できることならいっそのこともう声が出せないように下を引き千切ってしまいたいという気持ちまでである。

「何度だって言うさ！逃げるより、ジンを一人ぼっちにさせることの方がオレっちは悪く思うさ！！」

「お前なあ、本当にいい加減にしろよ？さもないと車から叩き落として丸焼きにしちまうぞコラ！」

「好都合さ！何なら今ここで下してくれたっていいさ！そしたら走ってでもジンの所に・・・」

「さっきから黙って言わせておけば貴様あ！！！！」

とうとう虎眼の堪忍袋の緒が切れてしまい、再び虎眼が憤怒してアゲートの首を鷲掴みにした。持てるだけの握力を駆使して器官と動脈を潰し、アゲートの喉から声を奪う。

先にもしつこい程話したが助けたい気持ちがあるのは虎眼の一緒、だが自分では力になれないから今こうして逃げの選択を取っている。ジンが最後に残した言葉が耳の奥にこびりつき離れないのも事実。

なのに、そのジンの託した思いを無視して今あの悪魔の元へ戻りたいなどとほざいているアゲートを見ていると無性に殺してしまいたくなくなってしまっている自分がいた。何も知らず、何にも気づけず、何も諭していないこのバカの姿を見ていると自分の本性を見せられているようで非常に腹立たしい感情になる。

「貴様・・・俺にできないことが貴様にはできると本気で思っているのか？思い上がりも大概にしておけアゲート。貴様などグスタフと対峙する前に、今ここでオレが直々に殺してやろうか、ああ！？」

「アグッ・・・！フグッ・・・！」

「反省するんだねバンダナ君。そして虎君、車内で人死には勘弁してもらおうか？後始末が面倒・・・ん？」

狭い車の中でドタバタ騒ぎだてられて運転に集中できないドクターがふとサイドミラーを確認すると、表情が一変する。それとまったく同時に助手席に座っていた猫眼も何かを感じ取ったのか体がビクンッ！と跳ね上がり、髪の毛が逆立った。

車の窓から身を乗り出して後方を確認すると、数百m向こうから砂塵を巻き上げて迫ってくる影が見える。ここまで迫られたところでようやく虎眼も気配を感じ取り、アゲートの首から手が離れ窓からその存在を確認する。

下半身に生えた二つの車輪で砂漠を疾走し、ありえないようなスピードで追いついてきたのは・・・もしもこれを見た者の視力が正常であればその正体はカール・グスタフ、その人であった。

あれから本当にごくわずかな時間で5人の車に追いついたグスタフはさっそく車輪の回転速度を上げ、車と並走させる。チラリと脇見をすると、車内にいる全員と視線が重なり皆一応に面白い表情をしていた。

驚愕、恐怖、絶望、疑心、衝撃・・・どれを見ても全く面白い顔をした連中だと思い、グスタフもその5人に微笑みかけた。最悪な意味で・・・。

グスタフはその身を5人の車のすぐそばまで接近すると、今度は左腕を車のエンジンルームへ突っ込んだ。厚さ5mmにも及ばない薄い板金などいともたやすく貫通すると、あっという間にエンジンが煙を上げ火が灯りだした。

腕を引っっこ抜き、その後回転速度を落としたグスタフは運転不能になった車の行く末をまるで余興のように楽しみながら見守るのだった。車内に取り残された5人は慌てて車から脱出に成功し、ドライバーを見失った車は全身を炎に包まれながら蛇行、間もなくガソリンに引火し大爆発した。

砂の上に転がされた一行は今一度グスタフの姿を確認すると、改めて絶望感に包まれてしまった。

「な・・・なんでアイツが・・・ここに？」

「おかしいねえ、小生視力は人並みに健康のはずだが・・・何か変なものが見える気がする」

「ニヤハハハ・・・夢？もしかしてこれ夢か？」

「貴様らそう思いたい気持ちはよく分かるが現実を見ろ・・・奴は今、確かにここにいる」

「ちょっと待つさ・・・え？・・・じゃあ、ジンは・・・？」

鎚を握る手が震えているアゲートの胸中に、何か嫌な予感がよぎった。

ジンは確か自分たちを逃がすために囷になってくれた、遠くに逃がすために時間稼ぎをしてくれているはず、なのになぜグスタフがここにいる？

なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・なぜ・・・

「くくくく・・・追いついたぞ小僧ども」

「キシシ、実に嫌なタイミングだねえ・・・しかもこんなに早くなんて」

「今の私に不可能などない・・・何せ私は神だからな」

「ケッ！言ってて恥ずかしくねえのかよおっさん？」

「これっぽっちも？何せ本当の事なのだからな、フハハハハハハハハ！！」

「フゥ、耳が痛イ耳が痛イ」

豪快に笑い飛ばすグスタフだが、こちらは全く笑える状況などではない。今こうして追いつかれてしまった以上、移動の足も失ってしまった以上、もう逃げ場などない。この男とこの場で戦うしか道がない。

出来る限り認めたくない現実だがそんな贅沢を言っていない身分ではない、虎眼と猫眼が先頭に立ちゆっくりと構えを取る。あの時二人の全力をぶつけた急造の限定奥義ですらまともなダメージがないと来れば、肉体の急所を的確に狙い、えぐり、貫く他無さそうだと考えそれぞれ拳を握るのだった。

「ジンは・・・ジンは・・・？」

「んん？どうかしたか傷の小僧？」

「ジンはどうしたさ・・・オレっち達の代わりに残ったジンは、いったいどうしたさ！？」

叫ばずにはいられなかった。身内の人間との信頼関係を最も重要視していたアゲートは、今この場に居ないジンの所在を知らない。知っているのは今現れたこのグスタフだけ、であれば一人残されたジンはどこへ行ったのか、なぜジンは食い止めてくれるはずだったグスタフがここにいるのか、全ての思いを込めてアゲートは咆哮した。

「ジン・・・？ああ、あのメガネの小僧か」

「答えろさ！！あんた、ジンに何をしたさ！？」

「・・・っ！待てバンダナ君、それを聞いてはいけない！！」

「クククク・・・いいではないか、教えてやろう。ちょうど土産もあるしな」

ドクターの静止など全く耳に入っていないアゲートは、すでに暴走に近い精神状態になっている。こうなっては正気に戻す方法は虎眼にもう一度殴られるほかないと思われる。

だがそんなアゲートの反応を楽しんでいるグスタフは本人の希望通り、全てを教えてやることとする。

車輪だった下半身が人間の下半身に形状を再現すると、右手から何か取り出した。取り出すというよりも、正確には何かが手の平から生えてきた。

グスタフの体は今、肉体に取り込んだ物質をそのまま武器として操ることができる。肉体の中に取り込んだそれを肉体から取り出すことももちろん可能である。

故にこんなことも・・・出がけに拾ってきたこのお土産を手の平から取り出すことだって非常に簡単なのである。

それを取り出すと、グスタフは5人の前に放り投げた。そしてそれが何なのか目撃した瞬間、全員が息をのむ。

それはメガネだった。レンズが砕け、フレームはひしゃげ、テンプルが折れ曲がり、そして赤黒く酸化した血にまみれている。赤いメタルフレームの、そしてアンダーリムデザインのこのメガネを5人は知っている。いつの日常的にこれをかけている人物を知っている。これの手入れをしている人物を知っている。

そしてその持ち主は・・・ここにいない。

「偶然拾ってな、貴様ら小僧にはちょうどいい土産だと思って拾ってきたわ」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「どうした、この土産がそんなに嬉しかったか？それならわざわざ拾って来た甲斐があったというもんだ。もっとも、持ち主は今頃カラスに啄まれているかも知れないがな・・・ハハハハハハハハハハ！！！」

・・・・・・・・ブチンッ！

「よくも・・・・・・・・テメエよくもおおおおおおお！！！！」

仲間を想う故に、我先んじて立ち向かう者也。アゲートとはそういう単純な男だった。温厚な性格の人間もひとたびキレれば鬼と化す、巨大な拳を振りかざしたアゲートは高く跳躍し、グスタフの脳天に狙いを定める。

落下エネルギーと自らの筋力をかけ合わせたアゲートの十八番、「パール・クラッシャー」が的確にグスタフの頭を破壊した。その衝撃は思いのほか凄まじく、砂の中へ膝が埋まってしまうほどのものだった。

だがグスタフの詳しいスペックを把握していないアゲートは気づいていない、こんな攻撃がいか

に無駄なことであったかを。

アゲートの手の中には確実にグスタフの頭蓋骨を破壊した感覚が伝わっている。対してグスタフは頬肉を釣り上げ嫌味のような笑みを浮かべると、アゲートの鎚をしっかりと握る。その光景に仰天するアゲートをよそにグスタフはアゲートごと鎚を腕一本で振り回し、力任せに放り投げた。

空中を発射された砲弾のように滑空するアゲートを猫眼が、落下してきた隕石のような拳骨ハンマーを虎眼が受け止めてくれた。受け止める際強烈な衝撃に猫眼は回転ドアのように何度かクルクル回転させられたが、虎眼は何事も無く片腕でキャッチしてみせる。

そしてようやくここで事の重大さを思い知らされるのだった。虎眼と猫眼の拳をもってしても仕留めることのできなかつたグスタフは、頭を破壊されようともなお生きて攻撃することができる、殺すことが全くできなかつたということ。

「くそっ！あんにやろう・・・」

「落ち着いたまえバンダナ君、奴はもう正攻法で倒せるような相手では無い」

「だよなあ・・・あいつ自身がまるでバグみたいな野郎だ、何でもアリだぜ？」

「ドクター・・・私、怖い」

「キシキシ・・・小生がいるから安心しな」

「・・・ドクター、これからどうするのが正解だと思う？」

アゲートの鎚を砂の上に突き刺した虎眼がドクターにそう問いかけた。自分の中で答えはすでに決まったも同然なのだが、ここであえて聞こうとするのが虎眼らしくないところである。ジンのメガネの残骸を見せられた時頭に来たのはアゲートだけではない、最低でも自分も頭にきていた。アゲートがあの時突撃しなかったらきっと間違いなく自分が特攻を仕掛けていたことだろう。しかしその考えも実際は正しくない、以心伝心・・・頭に来ていたのは全員が一緒であった。他の3人もすでに臨戦態勢を取り始めている。新しく手に入れた杖の感触を確かめるようにジェットがその杖を指で回し、ドクターもトランクを一度その場に捨て置き着くずれを整えて気合を入れ直し、猫眼も両の拳をバキバキと鳴らして威嚇をしている。

5人の瞳の奥には、ほんの数分前まで光を濁らせていた恐怖心が消え去っている。やるしかないと思っただけ柄はなく、今は亡き仲間の仇を打つという志を胸に、闘志を燃やしているのだ。

そもそもさっきドクターはグスタフを「正攻法で倒せる相手ではない」と称していたが、そんなことはこのメンバーの中において関係など全くない。なぜなら、彼らも元々「正攻法で倒しにかかるような連中」ではないからだ。

「なんだこの私とやる気か？貴様らは神の御前に立っているのだぞ、身の程を弁えたらどうなのだ？おとなしく私に殺される」

「・・・燃やしてやるよ」

「ならオレっちはアンタをペシャンコに潰してやるさ」

「火葬ならぬ氷葬というのも面白そうだねえ・・・キ〜ッシッシッシッシッシッシッシ」

「それじゃあ私が墓穴を掘ってあげるネ」

「そして俺が貴様を埋めてやろう」

彼らはもう止まることはできない・・・目の前にいる標的を完全に殺し切ることに頭なくなっている。実力の強弱だとか魔力だとか吸収とか自己再生とか、そんなものはもう関係ない。自己再生もできなくなるまで細かくすり潰してドラゴンの餌にしてやる、それだけだ。

「まあいいだろうかって来い、一人残らずあの世に送ってやる。全力でこの私に抗って見せろ」

「貴様ら覚悟はいいな？・・・いくぞ！！」

「「「「いよっしやあああああああ！！！」」」」」」

こうして神と人間との抗争、第2ラウンドが火蓋を切って落とされた。生き残ることができるのは果たして神を名乗る化け物か？それとも化物のような人間か？

続

## おまけ キャラクター詳細B

---

### ジェット・アメジスト

出身 ラプチナ大陸、ジオード村

前職 魔術師、家事手伝い

親族 父方の爺、父、母、兄3人、犬2匹

身体的特徴 髪／深緑、短髪、小さくセンター分け

髪の手入れ＝シャンプーオンリー（故に基本バサバサ気味）

服／黒いフード付きローブ（ワンピース）、Vネックシャツ

サイドジッパータイプのエンジニアブーツ

踵を高くして杖の上に乗しやすいように改造

魔術／5歳の頃より独学で勉強

一般的な魔術師の魔力の強さを100とした場合、ジェットは800

アクセサリ／レザーラップブレスレット（左手首）

キャラクターイメージ スバルリョーコ+レベッカ・リー

### ファントム・C・タンザニヤ

出身 ラプチナ大陸、セプタリアン（町）

前職 不語（かたらず）

親族 曰く「小生が生まれる以上、父と母はいるに決まっている」

身体的特徴 髪／白、短髪

前髪を伸ばして目元が見えない

服／黒染めの白衣（そのまんま）、サイズオーバー

腕に装着している武器を隠すためオーバーサイズの服を着る（袖で隠す）

黒い長袖シャツ、バギーパンツ

本革靴（ウォーキングカジュアル）

メス射出装置／両手首に装着（円筒形）、各5本ずつ発射可能

射出機に繋がるピアノ線をリングに結び、5指に装着

指を強く握り、手首を内側に引くと留金が外れて発射される

（強化スプリング発射式）

アクセサリ／シルバーペンダント（十字架+ミスティッククォーツ）

キャラクターイメージ クルル曹長+赤屍蔵人+葬儀屋

目の前が真っ暗だった。全身に力がこれっぽっちも入らない、指一本動かない。  
何もすることができない、何もする気力も起こらない。なぜなら今の自分は捨てられた雑巾なの  
だから・・・ただのゴミだから・・・ただの死体なのだから。  
もう疲れた・・・早く目を閉じて眠りたい、もう疲れすぎた。  
もう十分すぎる、やれるだけのことをやり尽くしたんだ。悔いなんかもうない。  
寝たい・・・休みたい・・・死んでしまいたい・・・。  
このまま力を抜けば簡単に死ぬことができる、もう面倒なことを考えなくて済む、もう面倒な旅  
もしなくて済む、もう面倒な喧嘩もしなくて済む、

面倒な・・・面倒な・・・面倒な・・・・・・何もかもが面倒くさい。

もう生きるのも・・・

面倒くせえ・・・

「・・・・・・・・」

「・・・もしもーし、あのう、生きてますか？もしもーし！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ」

耳の奥に、かすかな声が聞こえてきた。体中が痛い・・・苦しい・・・いっそのことさっさとくたばってしまった方がこの苦しみから逃れられるのだろうが、なぜかそうすることができなかった。

心から死にたいと思ったのはこれが生まれて初めて、なのに腹の底では、まだ死んではいけないと自らを叱咤し、必死になってもがく自分がいることをたった今知り、自身のことを馬鹿だと称した。

ジン・K・ジェイド、彼は今左腕を失い、右足のひざから先を欠如してしまっている。目を覚ましたところで、この出血では到底助かりそうにないのは明々白々。

そう悟るとまた同じことを思ってしまう・・・死にたい、と。

「もーしもーし、生きてるんですね？ジンさん、ジンさんってば！」

「・・・・・・・・・・・？」

またあの声が聞こえた。いったい誰だ、これからさっさと死んでしまおうとしている人物の目の前で人のことを呼び掛けている非常識な輩は？

ごく僅かに瞼を開いてそれを見してみるが、生憎メガネが無いのでそれが誰だったのかハッキリ確認することはできなかった。

薄ボンヤリする視界の中に映ったシルエットは、見たことのあるもので間違いはなかった。男で、手足が長くて、全体的に体格が細い。それぐらいしか分からないのだが・・・記憶にはあるはずだが名前が浮かんでこない。

コイツは・・・誰だ？

「呼吸・・・してる。心臓・・・弱いけど動いてる、確かに生きてますね！ちょっと待っててください、ボク良いもの持ってますからね」

テキパキした手つきで男はジンがわずかに生きていることを確かめると、手持ちのカバンの中から何かを取り出して作業を始める。ジンは何をしているのか見えないので代わりに解説をしよう。

彼がカバンから取り出したのは複数の石とフラスコ、そして溶液の詰まった薬瓶と注射器。石はラプチナ産の薬石、サンストーンとカーネリアンとパール。それぞれの効果は「生命力の活性化」、「造血作用」、「熱や腫れの軽減」である。

豆知識であるが、薬石の効果は身に付けているだけでも効果は現れるが、特殊な溶液に成分を溶かして直接体内に注射すると通常の何倍もの即効性が生まれる。本来ならば細かく砕いたものを

溶液中に浸し、破片が残らないように気を付けながら3回に分けてしっかり濾し、それを注射するのが正しいのだが彼はその知識までは持っていない様だった。あろうことかフラスコの中に直接薬石を投下しその上で溶液を流し込み、よく振って薬石の効能を溶かし出している。

必ず砕くのは細かく分量を調節するため、薬石本体丸ごと一個をそのまま使用すると効果が強すぎて薬としての役割を正しく果たせなくなり、毒薬と化すからだ。

それに全く気が付いていない彼は、その強烈な効果を溶かした溶液を注射器に流し込んで「準備OK」などと呟いている。

死体同然となったジンの頭を自分の膝の上に置いて針を打ちやすい体制に整えると、注射針を首元に突き刺して中身を注入してしまった。

するとジンの体はどうなるか？

「・・・・・・・・」

こうなる。



「・・・・？」

ピースメーカー・・・・ジン達がこのシーバルー大陸に訪れる際に利用した大型の連絡船の名前だが、それは覚えている。そこから先真っ先に思い出す人物と言え船内の図書館で出会ったあの少女なのだが・・・・生憎こいつは男。

男・・・・・・・・・・ジンはもう一度ぼやける視界の中で男の顔を確認した。生憎表情も確認できないくらい視力が悪いので目を細めてピントを合わせてもよく見えないが、この顔の輪郭や男の体格・・・・確実に覚えている。

たっぷり時間をかけてぼやけた記憶の棚の中を整理しながら思い出していくと、ようやく引き出しの中からこの男の名前を思い出すことができた。

「・・・コン・・・バット？」

「そうです、コンバット・ベルグマン。ボクの事はコルトでいいですよ。お久しぶりです」

「コルト・・・そうだお前だ。お前だったのか」

「思い出していただけて光栄です。と、そんなことより急いで病院に行かなきゃ！」

男の名はコンバット・ベルグマン。詳しい説明は省くが、この男はピースメーカーでの航海中ジンと出会い、意気投合した仲である。

なんで今ここで再び会い見ることができたかはどうでもいいが、こいつに拾われたことはジンにとって非常に幸運なことであるのに間違いはない。地獄に仏、九死に一生とはこのことだろう。

コルトはジンの体を肩で支えながらゆっくり持ち上げると、そのまま少し重そうにしながらジンの足を引きずって近くの病院まで運ぼうとする。事情は完全に知らないのに仕方ない上に、この場で病院に向かうのは当たり前な行動なのだが今のジンには全く嬉しくないことであるのまた事実。ここの病院にもフェイファ一軍の息がかかっているのは分かりきっている、今の状況では治療を受ける前にこのまま捕縛されてしまうかもしれない・・・それどころか殺される可能性すらある。

それより前に・・・ちょっと待て、重要なことを忘れていたことにジンが気づく。自分はグスタフに負けて手足をチョン切られ、おまけに逃がした連中を追いかけに行ってしまった。連中の心配などミジンコー匹分もしていない、重要なのはジンが負けっぱなしで放置されている今の状況にある。

このままで済ませる気などさらさらない、今すぐに追いかけてあの野郎をブチ殺す・・・そう思うだけでジンの心に闘志の炎がメラメラと燃え上がってくるのだった。おちおち病院になど行っている暇などない。

「コルト待ってくれ、行きたいところがある・・・砂漠に、あの野郎を追うから砂漠に行きたい。そのための足も欲しい」

「何馬鹿なこと言ってんですか、何があったか知りませんがそのケガで何ができるんです。砂漠越えなんて無理ですよ」

「無理とか無茶なんかどうでもいい！！あの野郎・・・人のことを舐め腐ったあの野郎だけは絶対に殺す！！」

ジンの中で闘志以外に、激しい怒りの感情が込み上げてくる。コルトにいくら言っても駄目だというのならばもうコイツに頼ることもやめにした。

ジンはコルトの肩から離れると、片足だけであのグスタフが走り去ったであろう街道を追い、砂

漠へ向かい歩き出そうとする。幸い石畳の上にはグスタフの作った凶悪なスパイクタイヤの痕跡がしっかりと残っている、これを追っていけばアイツを追いかけることができるのだろうが・・・それはあまりに時間のかかり過ぎることになるだろう。

ジンは一歩歩こうとしただけで石畳の上に倒れてしまった。片腕片足を失い体のバランスが全く取れない、と言うわけではなく明らかに歩くことなど不可能な体をしているのだ。まさしく歩けるはずなどない。

ならば這ってでも、と思いジンは口の中に入った砂を吐き出し、奥歯を食いしばりながら右腕一本で全身を引きずり、ナメクジのように地面の上を這いずり回ろうとする。

だがそのすぐに、見るに見かねたコルトがジンを持ち上げ、今度は米俵のように体を直接肩の上に担いでしまった。もうこうなってはジンにどうすることもできない。

「馬鹿野郎！！離せ、下しやがれ！！」

このやり取りはグスタフとも一瞬やり合ったことを思い出し、思わずもぎ取られてしまった右足の傷がうずいた。

「・・・そんなにその人のことが嫌いなんですね」

「ったりめえだ！！あの野郎は絶対に殺す！！何がなんでも殺す！！」

「この傷はその人に付けられた物なんですか？」

「ああそうだよ文句あるか！？この落とし前は千倍にして返してやらなきゃ気が済まねえんだよ！！」

「・・・・・・・・よく分かりました」

コルトはこれ以上ジンから深く話を聞こうとはせず、肩の上で暴れるジンを決して離してはくれなかった。

やがて大きなため息をつくとき、コルトはその場で踵を返し、町の外へ向かって歩き出したのだった。

「そこまで言うのなら協力しますよ、ジンさん」

「ああ、それでいい。車だけでも手に入れば十分だ、自分で追える」

「僕が運転しますよ、その体で運転は不可能です」

「別に付き合う必要なんかねえ。オレの問題だ」

「よく言いますよ、誰に助けてもらったんだか・・・それより、勝算はあるんですか？」

助けてもらったことに関してはぐうの音も出ない。

再びグスタフと喧嘩をした時の勝算に関しては・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・・・・・・・・

考えるだけ無駄だ、ジンはその場で思考を打ち切り、考えるのをやめた。

「勝算とか勝てるかとか、そんなものは関係ねえ・・・必ず殺す、それだけだ！」

「そうですか・・・ならきっと次は勝てそうですね。いえ、絶対勝てます」

ジンからはコルトの表情は見えないが、コルトは笑顔でそう言ってくれた。

本来こんな場面では誰もがジンの行動を止めるべき場所なのだろうが、あえてコルトはそうしなかった。止めても無駄だと悟ったわけではない、実は明確な理由がある。

「絶対・・・勝てる・・・？」

「ボクの友達がよく言っていたセリフの反芻なんですけど、「体に受けた傷の数だけ、人は強くなれる！」、とのことですよ」

「傷の数だけ・・・強くなる・・・か」

「ジンさんはこれ以上ないくらいボロボロになっています。ということは、その分だけ強くなっ

ている証拠です。だから次は絶対に勝てます！！」

・・・正直言って根も葉もない、全く根拠もない謎の理屈にしか聞こえなかった。  
だが、その謎の根拠は、確かにジンの胸の中で強く響いている。  
強くなる・・・今まで負け知らずで勝ち続けてきた自分が抱いたことの無い思い。強くなりたい、もう二度と負けたくない、二度と負けない力を手に入れたい。  
面倒なことが大嫌いで努力することを怠け続けていたジンが、純粹に新たな力を手に入れることを願う。グスタフを、あの男を確実に殺し切れるような、無敵の力を欲する。  
そのためには自分一人では無理だと思われる、今ジンが強くなるために必要なものは何か？それを考えると思い浮かべるものが一つだけ。  
それは・・・・・・・・・・言わないでおこう、自分の口で言えるようなことではない。  
なにより、あれだ・・・・・・・・それがバレてしまうと小っ恥ずかしい。  
満身創痕だったジンの口から、思わず小さな笑みがこぼれてしまう。

「ハハハ・・・最っ強にバカなのは、オレだったか」  
「どうかしました？」  
「何でもねえ・・・とにかく急いでくれ！」  
「極めて了解、お任せあれ！」

続

今回のネタバレ、ジンが展示品の中から選んでかっばらった2本の刀

山城大掾藤原国包→某奥州筆頭の愛刀

九曜拵え→竜の右目の人の愛刀